

『被災者が伝えるラジオ～女川町～』



『女川さいがいエフエム』ボランティアスタッフ

星 永 諭

「こちらは79.3MHz。女川さいがいエフエムです」でスタートする『おながわなう』。4月21日に開局した臨時災害放送局『女川さいがいエフエム』の情報番組です。

『女川さいがいエフエム』を運営するのは女川町で育った10～30歳代の有志の若者11人。今回の震災で女川町は人口の1割が犠牲となり、住居や店舗、事務所の7割強が被害に遭いました。そのため、局員も家族を失ったり、あるいは家族や友人を津波にさらわれたりとそれぞれが心に大きな傷を負っています

す。それでも、「女川の町に正しい情報と元気を届ける放送を がんばっぺ女川」を合い言葉に開局以来一日も休まず放送を出し続けています。

発足当時から中心的な役割を担ってきた星永諭さん(30)も、家を流され仮設住宅で暮らしています。星永さんに発災時の状況や津波に対する考え方、災害時のマスコミのあり方なども交えて聞きました。

(※現在、星永さんは女川さいがいエフエムを辞められています)

想像以上：津波の恐怖

「SF映画でよくあるじゃないですか、水中都市。あんなイメージだったんです」。津波に対する印象を聞いたとき、星永さんの口から出たのは意外なセリフだった。当初、発表された津波警報は6メートル。自宅は海拔5メートルほどのところにあり、海から距離もある。チリ地震のときに自宅の駐車場が冠水した写真を見たことはあったが、これくらいではと高を括っていた気持ちもないわけではなかった。「半分なめていた」。

それは行動にも表れた。「知り合いのおばあちゃん、足の悪かったから、車に乗せるあげる手伝いをして。あと、飼い猫がどつかにいつちやっていたから探したんですけど、見つからなくて。一回、高台にあがってもう一回降りて見に来ました」。女川町に津波が到達したのは15時29分。地震発生からおおよそ40分後だった。このタイムラグこそが大きな犠牲を生み出した原因と言われている。とはいえ、直感として感じていたのは「この揺れはちよつとヤバイかも」。

再び高台へと避難した星永さん。「逃げて上ってきたところに水が押し寄せて、さらに逃げて、また逃げてという感じでした」と当時を振り返る。女川町に押し寄せた津波は公式発表では14.8メートル。しかし、実際は20メートルほど。想像と想定を遥かに超えていた。眼下には船舶のみならず多くの家屋が根こそぎ流される光景が広がっていた。それでもなお、星永さんは

「家は残っているだろう」と思っていたという。

一夜明け、不安になった星永さんは自宅の見える別の高台に移動。そこで、見た現実に愕然とさせられた。「最初は山側の家の壁が見えたから、あれ？大丈夫なんじゃない？という感じだったんですけど、よく見ると、屋根から上はごっそりなくなっていて…。でもね、道路を挟んで海側の家は、なかは持っているかれていますけど、外側は残っている。不思議でした」。そのとき怒りや悲しみはなかったのかと聞くと、星永さんは淡々と「アアアアって感じでしたね」。

津波に対する防災番組、役には立たず

「津波って、ここまでの衝撃。生も実写も含めてありましたっけ」。素朴な疑問が星永さんの口をついて出た。確かにそれほど多くはないかもしれない。近々のもので一番印象に残っているとすれば、2004年に22万人以上の犠牲者を出したスマトラ島沖地震で発生した津波の映像ではないだろうか。海岸で人が次々と津波に吞まれていく映像は惨憺たるものだったが、文字通り『異国の出来事』であったため、多くの人は自分の身に起きることは想像できなかったのではないだろうか。

津波の生の映像が印象に残っていない星永さんに防災の意識は高まるはずはなかった。そして、今回の津波を経験してしまっただが故に、いままでの防災番組はあまり役に立っていないと感じたという。「逃げなきゃダメなのは分かる。持ち出し袋を作って、ラジオを入れて、カンパン入れて。命が大事だから、それを守るのは当然ですよ。でも、津波で家をまるごと失う事が前提になっていたら、持ち出すものって変わってくると思う

んですよ」。実際、星永さんが逃げるときに持ち出したのは、たばこ、ライター、携帯電話、ラジオ。そして「今夜一晩帰れないと困る」と思って持ち出した飴だけ。そうした経験から「本当は馬鹿にされても良いから、大事なものを持って逃げるということをしなればいけないかった。趣味のものとかも含めて、お金では買えないようなものをね。でも、

そこまでの準備、想像は大半の人はできなかったでしょうね」。では、今回の映像は津波の怖さを伝え切れていたのだろうか。星永さんによると、「現実がSF過ぎちゃって、テレビで見る映像がまったく別のものに見えてしまう。僕らが見ていた同じ映像が流れているはずなんですけど、やっぱり、全部は表現できていない。たとえ、編集なしで同じ尺の映像を見たとしても違う。不思議な感じ」なのだそう。それだけ、画面を通すと印象は変わってしまい、事実であるにもかかわらず、ある意味『別なもの』として伝わってしまうのかもしれない。

ツイッターがきっかけで臨時災害放送局に参加

もともと震災が起きたときにマスメディアの情報が局地的に役に立つとは思っていなかった星永さんだが、発災直後の報道はそれを裏打ちするものだった。「マグニチュードの訂正があり



女川第二小学校校庭の局舎



2坪もないスタジオに所狭しと並ぶ機材

大津波警報の情報がフォロワーから寄せられる。「ネットの方が使えた」。

大手マスメディアの情報で特に不快感を抱いたのは12日の明け方にラジオで聞いた女川に関する第一報。『女川町壊滅状態』。Nスぺによれば、地震発生後、液状化現象が起きていた女川町は他地域に比べ建物の倒壊が著しく、深刻な被害が出たとされている。当時の記録を見ても、その事象を裏付けるように宮城県内で唯一の「連絡不可」。市街地の壊滅は想像に難くないが、星永さんは「連絡が取れないと正確に伝えるべきだったのでは。全員が死んでいたわけではない」と憤る。

星永さんはツイッターを通じ、死者5000人ともいわれた情報は違うとつぶやいたり、ブログに女川町の現状の写真を載せたりした。ツイッターのフォロワーは一時、2000人を超えるまでに膨れあがった。「情報を知りたい人がいる」と手応えを感じた一方で、その情報が支持されるか、されないかで洩

ましたとか、切羽詰まっていた人間にとって、そういった情報よりもより具体的に何がどうなっているのか、そして、どうなるのかを知りたかった。地震発生直後から津波

がくるまで、情報を得るための頼みの綱となったのはネットだった。常日頃からツイッターを使っていた星永さんは「緊急！地震で停電！情報不明！」とつぶやく。すると、

汰されるといふ現実も味わった。「例えば、海に向かって横倒しになっていくビルをそのまま載せても、『縦の写真を横にしたんじゃないの』みたいに言われてしまう。事実が消されてしまうのは残念でした」。

町の正確な情報をつかめなかったのは町民も同じだった。防災行政無線や広報車などの機能は津波で失われていた。星永さんも「歩いて情報を取るしかなかった」という。その現状を打破したいと考えていたのが女川町出身でボランティアをしていた松木達徳さん。松木さんはたき火で暖を取っていた星永さんに臨時災害放送局の開設に加わらないかと声をかけた。「おもしろそうだ」と思った星永さん。「一個人のつぶやきは抹殺されても、行政という後ろ盾があれば、自分の出す情報を信じてもらえる」。

放送局に参加して見えたこと

女川さいがいエフエムは開局当初から、『炊き出しがどこで行われるか』や『水道はどこまで復旧したか』といった生活情報などから、渡辺謙さんとの対談や女川町出身の中村雅俊さんからのメッセージ、あるいはリスナーからのリクエストにこたえて音楽をかけるなど、コミュニティFM的な要素も盛り込むことで、女川に元気を届けようと努めてきた。そして、女川町への放送だから女川町に徹底的にこだわった。地名も全国統一の読み方ではなく地元呼び方。「えこひいきしたっていいぐらいだと思っていた」と星永さん。結果、放送は好評を博し、多くの臨時災害放送局がその役割を終え閉局していくなか、女川さいがいエフエムは今年いっぱい延長が決まっている。また、

サイマルラジオやインターネットを通して、女川町以外の地域でも聴取可能だ。

しかし、継続すれば継続するだけ課題も出てくる。星永さんが感じているのは行政との距離感。「私たちは素人ですから、情報の扱いになれていない」と星永さん。「行政批判になるかも知れないけど、行政は公式に物事が決まらなさと情報を開示してくれない。たとえば、臨時職員の募集なんか期限が3日しかなかったんですが、私たちに情報が降りてきたのは、募集をかけた初日の夜。もう少し情報を早くくれれば…」と対応への不満を口にする。「免許人は災害対策本部。もう少し、うまくやっていける体制にしたい」。



放送法施行規則では臨時災害放送局は暴風、豪雨、洪水、地震、大規模な火事、その他による災害が発生した場合に、その被害を軽減するために役立つことと定めている。被災した人の女川町からの流出も被害の範囲とするならば、それを防ぐための雇用情報を流すことは被害の軽減につながるのではないか。そのために臨時災害放送局が必要な情報をいち早く正確に流すことは、大事な役割ではないだろうか。

最後に星永さんにラジオの難しさを聞いてみた。すると、

「スキルは磨いているのですが、やっぱりラジオは表現力が必要。しゃべりが止まってしまうと番組が成立しない。誤解を恐れず言えば、映像があれば何とかつなげるんですが」とポツリ。「放送法とかややこしいことがあるかもしれませんが、テレビの臨時災害放送局があっても良い気がするんですけどね」。

報告 中央組織部長 竹内哲哉